

## 俳優 石上亮の大好きな宿題

### 『映画感想文』

#### 第3回 インビクタス／負けざる者たち

2010年2月23日

小学校3年から中学校3年まで、オレはイジメられっこでした。小学校では、シモザ（仮名）くんとチュウタ（仮名）くんという2人の運動神経抜群のイケメンが、目の前に立ちまはだかりました。かなりの強敵。オレは勉強で対抗しようと思いました。中学校に上がると、今度はダイリ（仮名）くんという新たな強敵が現れました。一難去ってまた一難。とにかくイジメられっこのオレは、「差別と区別」について学ぶ道德の授業や学級会が、苦痛でした。心の中を覗かれてる気がして。幸い、オレの場合は言葉による差別だけでした。

『インビクタス／負けざる者たち』という映画を観ました。2008年に事実上の俳優引退宣言をしたクリント・イーストウッドが監督です。クリントの監督作品は『マディソン郡の橋』『ミスティック・リバー』『ミリオンダラー・ベイビー』『父親たちの星条旗』『硫黄島からの手紙』『チェンジリング』を観たことがあります。ちなみに、クリントが俳優業最後の仕事として臨んだ監督作品『グラン・トリノ』はまだ観てません。なので、これ以上クリントについての知識をひけらかすのは、やめときます。ボロが出て、クリントに「Go ahead. Make my day.」と言われかねません。クリント映画は、テーマをしっかりと打ち出し、それを丁寧に描くことで、映画がリアリズムを帯びてこちらに訴えかけてくるんです。観終わった後には必ず「何か」がズシンと残ります。本作は、ネルソン・マンデラ大統領が誕生した直後の南アフリカ共和国を舞台に始まります。白人は芝生のグラウンドでラグビーに、道路を挟んで黒人は土のグラウンドでサッカーに興じる姿は、南アのアパルトヘイトという人種隔離政策を見事に表現しています。その道路を護衛された大統領(モーガン・フリーマン)の車が通り過ぎます。このシーンが象徴する様に、大統領は差別のない新しい国を目指して怖れず改革を進めていこうとします。黒人の象徴がマンデラ、かたや白人の象徴はラグビー南ア代表主将フランソワ・ピアース(マット・デイモン)。黒人大統領が誕生したことで、地位の逆転を怖れる白人たち。ラグビー南ア代表も1人の黒人選手を除き、他は全員白人。おまけにW杯を1年後に控え、試合で惨敗したりと調整不足は明らか。南ア人口の大多数を占める黒人の怒りの矛先が白人へと向き始める国情。混迷を極める国を治める為に、マンデラはフランソワと共にW杯優勝を目指し歩み始める。その過程で徐々に人々の心が動いていく様が、子供から大人までしっかりと描かれています。マンデラの目指した政治がラグビーを通して体現されていく。クリントは、人に意志がある限り、支配は意味がないということを言いたかったのかもしれませんが。イジメられっこのオレは、自分の殻に閉じこもって勉強一筋の道に梶を切りました。そのせいで多くの友達を失いました。それでもやってこれたのは、心だけは支配されてなかったからかもしれません。